



未来を切り開くため、すべての人のちからと知恵の集結を 大竹市長 入山 欣郎

明けましておめでとうございます。皆さまには、希望あふれる輝かしい新年を健やかに迎えのことと、お慶び申し上げます。平成という一つの時代が終わり、令和の時代が幕を開けました。今年は新たな気持ちで、力強い第一歩を踏み出す年になります。東京オリンピックの開催も控え、日本中が盛り上がりを見せる中で、景気も着実に上向いていくことを期待しています。

大竹市においては、長年の大きな宿題であった大竹駅周辺整備事業が本格的に動きだす節目の年になります。

本事業は、すでに、市民の皆さまにはワークショップという形で駅前広場の活用方針など、さまざまなアイデアをいただいています。皆さまのまちへの愛情と、自分たちでまちを元気にしていこうという熱い思いに対し、心から感謝をしますとともに、大変心強く感じています。

謹賀新年



開かれた議会、推進する議会、信頼される議会を目指して 大竹市議会議長 細川 雅子

明けましておめでとうございます。皆さまには、輝かしい希望に満ちた令和2年の新春を健やかに迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

昨年9月、改選により新たなメンバーを迎え、新体制で大竹市議会がスタートいたしました。しかしながら、平成27年以来、毎年開催してまいりました議会報告会を、体制を整える時間が不足したこともあり、開催することができませんでした。

今までに4回の報告会を開催してまいりましたが、回を重ねるごとに参加者が減ってきています。この現実と真摯に向き合い、変化を恐れず、変えるべきところは変え、市民の皆さまに「行って良かった」と思っていただけだける議会報告会にしようとして、今年の開催に向けて準備しているところです。

また、議会基本条例が平成30年12月に制定されました。現在、議会では議会改革特別委員会を設置し、条例の精神にのっとった議会改革を精力的に進めています。加えて、昨年の市議会議員

一般選挙が無投票になったことを受けて、議員のなり手不足の解消に向けての議論も進めているところです。

議会の責務を常に自覚して、最良の意思決定を行い、市民福祉の増進はもとより、市民に開かれた議会、市民参加を推進する議会、市民の皆さまに信頼される議会を目指して、一歩一歩ではありますが、議員一丸となり歩みを進めてまいります。

昨年は、本庁舎5階の耐震改修工事により、本会議場の傍聴席とトイレがバリアフリーになりました。空調も改修され、今までより快適に傍聴いただけるものと思います。どうか議場にお越しいただき、皆さまの感想や気付きをお寄せいただきたいと思います。

本年もなお一層のご支援ご協力を心よりお願い申し上げます。この1年が皆さまにとって幸多い年となりますことをお祈りいたしまして、新年のごあいさつといたします。



広島県の西の玄関であるまちの顔として、新たなシンボルとして、素晴らしい駅になるよう、これからも市民の皆さまと一緒に頑張ってまいります。

また、ふるさと納税という形になります。昨年12月から大竹駅再生プロジェクトとしてクラウドファンディングにより寄付を募集しています。寄付をいただいた方のお名前を駅のデザインの一部に刻むことができます。より良い駅の整備のため、ぜひ市内外問わず、お知り合いの方に呼びかけをお願いします。

さて、昨年の千葉県や長野県など東日本を中心に甚大な被害をもたらした台風や豪雨については記憶に新しいところです。一昨年には西日本豪雨災害が発生しました。好況感の一方で、50年に一度、100年に一度といわれる災害が毎年のように発生し、われわれの生命を脅かす時代になってしまいました。また、人口減少や少子化、高齢化といった国や地方をとりまく社会情勢は依然として厳しいままです。

これらの課題に対応し、未来を切り開いていくためには、行政の力だけでは十分ではありません。市民の皆さまをはじめ、大竹に関わるすべての人が、ちからと知恵を集結して、それぞれの役割を担うことが欠かせないものと思っています。

先人がつくりあげた、このかけがえのない大竹のまちを、次の世代に引き継ぎたい。この思いを胸に、笑顔があふれるまちであり続け、みんなが誇りに思えるまちとなるように、これからも取り組んでいきます。どうか皆さまの、ご支援、ご協力を引き続き、お願いします。

本年が皆さまにとって幸多き一年となりますよう、お祈り申し上げます。新年のごあいさつといたします。

絵馬を描いて40年 絵師が天職



岩国市の神社の依頼で描いている壁画(縦2.2m・横7.2m)に筆を入れる長野さん。

6ページに掲載の今年の干支のねずみの絵馬。描いたのは、長野貢(雅号・晴璋)さん(84歳 新町3)です。およそ40年前から描き始めた絵馬は、全国各地の神社に納められています。以前、6千社までは数えてみたものの、その後は見当がつかないと頬を緩めて話してくれました。

絵を仕事にし始めたきっかけは、昭和51年。勤めていた会社が希望退職を募り、脱サラをして看板屋を始めたことでした。40歳代の働き盛りでしたが、どうしても自分のやりたいことを仕事にしたいと、新しい一歩を踏み出しました。しかし、看板の仕事の先行きも考え、賞状などの筆文字も手掛けるようになり、それは今でも続いています。馬を描くのが得意で、頼まれて描いた絵馬が神具などを扱う大手の業者の目に留まって、注文が来るようになり、今に至ります。

「天職を見つけた」と話す長野さん。自らを絵師と呼ぶ目には、まだまだ描き続けるという意志と誇りがうかがえました。